

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.25)

「カエルの面に水」

・・・生活に静けさを、音戦争の真最中です・・・

私たちが住み、暮らし、働く生活のなかで、様々な音に囲まれており、人間生活に不快感をもたらす騒音や雑音、いわゆる人間にストレスを与える「負の音」が多く発生している。

この音の感覚については、国、あるいは民族により相違があるようだ。公共乗り物機関での、傍若無人の若者のヘッドホンステレオから洩れる、ビートの利いた「カシャ、カシャ」音。これは日本もメキシコも変わらない。さらに携帯電話もこれに加えよう。

どこでも突然鳴り出す呼び出し音・・・私が実施している講義中にも、聴講生へ容赦なく侵入してくる。次の言葉を探そうと必死にもがいている、当方の思考を妨げるものの一つである・・・

しかし、永年電気通信を生業にして、利便性を強調してきたボラッチョ・ボニート氏にとっては、日本の電車内等での、「車内での携帯電話の使用は、回りの方々に迷惑がかかるので、使用しないで下さい」というアナウンスは、うるさいアナウンスだなど、内心怒りを覚えると同時に、利便性の負の側面をことさら強調されたようで、背中に冷水を浴びせられたごとく、涙が出るほど悲しく感ずる。

メキシコでは、公共交通機関においては、到着駅名はもちろんのこと、各種の案内などこの種のアナウンスは殆ど無いかわりに、車両内に入れ替わり立ち代りやってくる、海賊版のCD販売者の宣伝用高音量のスピーカの音がこれにとってかわる。

人前でクチャクチャさせながら噛んでいるガムの音などは、不必要と無神経さの交わった、一方的に聞かされる不愉快な騒音であるが、メキシコではガムをかんでいる人は沢山見かけるものの、このガムをかむ音は聞いたことが無い。また食べ物を食べる時の音も比較的静かである。

おしゃべりしながら食べることが多い割には、食べる行為自体は音がしない。日本の美味しい物を食したときの表現の、「舌鼓をうつ」という感覚や、ソバや汁ものなど音を立てて、のどに流し込む食文化の伝統が無いからだろう。

こんな環境の中、ボラッチョ・ボニート氏は、目下、日本とメキシコでの音の感覚に関する差異を実感しつつ、自然の静粛さに文化を求めがちな日本民族と、音、特に音楽に対する許容度の高いラテン民族との、大げさに言えば音に関する、民族戦争を4ヶ月ほど続けている。(大げさすぎたかも?)

事の顛末を語ろう。上階の18歳前後の若造(あえてきつい言葉を使ってしまう)が連日、ドラムの練習を長時間行うのであった。なにせ、1メートル90以上、100キロを超えるかと思える巨体で、ドラムを叩き、ダミ声を発して歌い、しかもマイク、アンプ、スピーカーを使うものだから、音の迫力はすさまじい。

それが建物の壁や天井を伝わって音となって出る、いわゆる建築学で言う、固体(伝播)音と、直接伝わってくる空気(伝播)音が混ざり合って強烈なのである。まるで、ディスコのライブの席にいるようなものだ。

ライブ演奏でのドラム音は、周りの楽器と一体となって心地よいリズム感をかもし出すが、ドラム単独音だと、きわめて単調に聞こえ、音楽というよりは雑音としか感ぜず、それが長時間続くと頭が変になってくる。

人の耳には目のまぶたに相当するものがないから、まぶたを閉じるように、耳を閉じるわけには行かず、最

初の頃は、音楽の練習だから、あるいはことを荒立たせても面倒だと思い我慢していたものの、余りにもその酷さが続くので、寛容と忍耐の服を着て歩いているような？ボラッチョ・ボニート氏も、ついに堪忍袋の緒を切らして抗議したが埒があかない。

住民内規では、音響機器類は演奏禁止だというので、アパート内の周囲の住民は、はじめは抗議した人もいたようだが、現在ではしていないようだ。諦めか、日常生活においても、音楽は比較的大きめの音で聴く習慣を有している、音楽に対する感覚の相違による、許容限度内と認識しているのかはわからない。

最近にいたり、大音量は少し下げ、長時間の演奏は短くなったものの、抗議しているのは当方だけと高をくくっているのだろうか、相変わらず当方を挑発するごとく、演奏自体は続けている。

これからも果てしない戦いが続いて、今後とも抗議が通じず、当方の敗北に終わり、転居を余儀なくされるか、我慢するかと思案投首中であるが、抗議の空しさが次の諺を思い起こさせる。

「**No hay peor sordo que el que no quiere oír**」(ノ アイ ペオール ソルド ケ エル ケ ノ キエレ

オイール と発音し、意識すると、聞こうとしない人ほどたちの悪い人はいないである。日本の諺に相当するのは、「カエルの面に水」あたりか。これをタイトルに使ったが、馬の耳に念仏、その連想から馬耳東風、さらに言えば暖簾に腕押し、豆腐に鎧、糠に釘などいくつも思い至る)

雑音は一見、社会生活の活力を溢れさせているように思えるが、情緒という面では社会が幼稚で成熟していないから、雑多な音があふれているのではなからうか。

「文明の進化は音量によって測定するのも知れない。石器時代のわれわれの先祖は獣の吠える声、川のせせらぎと風に揺らぐ木の枝の触れ合う音くらいしか聞かなかつたらう」と、書名は失念したが、ある本に書いてあった言葉が思い浮かぶように、騒音から逃れるためには、高い金を出して都会から離れるしかない。

究極の静けさが、人生の終末たる死のときしかないというのなら悲しくも哀れである。

(2009年11月16日、本日は11月20日のメキシコ革命記念日の代替休日にあたり、昼間から上階の騒音を聞きながら本稿を書きました)

「以下の写真は、首都を離れた世界遺産登録都市、ケタロ市に仕事で滞在した折、撮影した」



スペイン統治時代の水道橋

次のページにも写真があります



周遊観光バスからみた水道橋



旧市街の歴史地区には20以上の教会がある



石畳とコロニアルの町並み、バロック様式の教会 …ケレタロの特徴



街中の小食堂のカラフルな椅子とテーブル
…珍しいので思わず写真にとりました